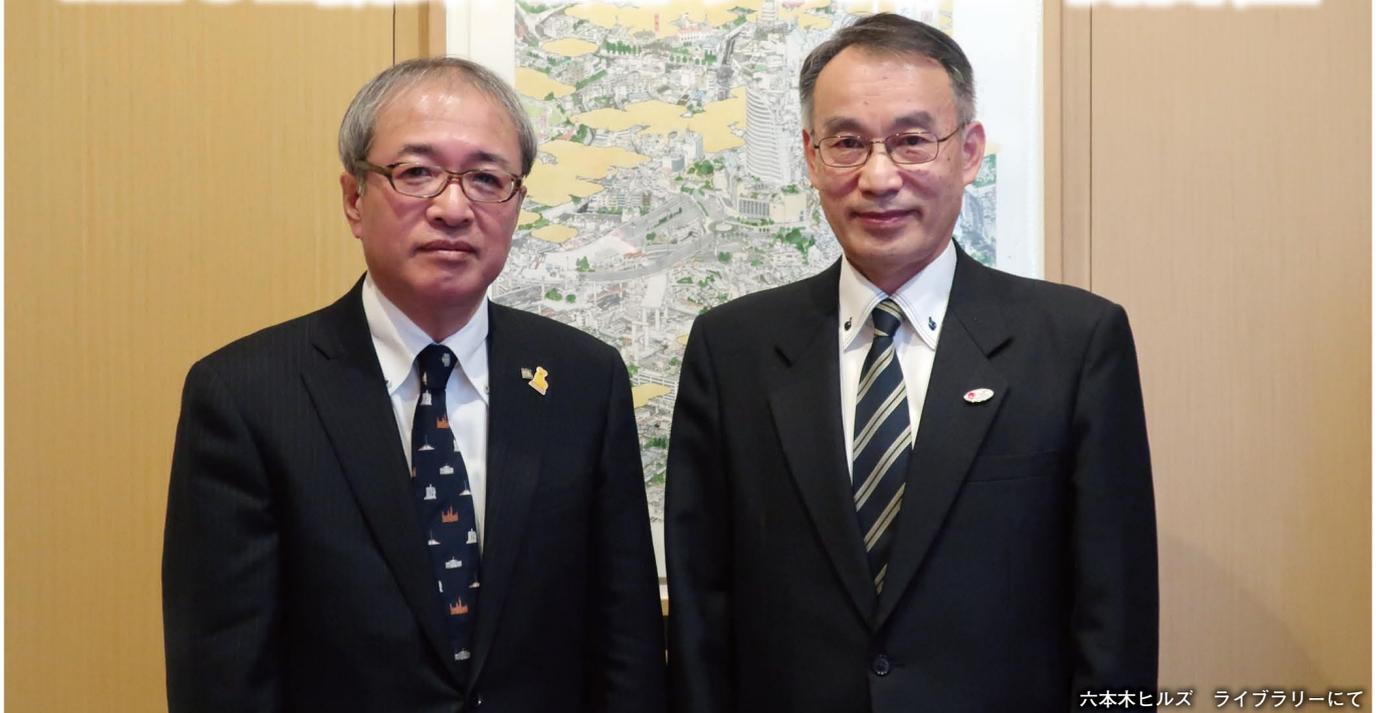


地域の産業集積の強みを生かし MICE誘致を進める愛知・名古屋



六本木ヒルズ ライブラリーにて

(公財)名古屋観光コンベンションビューロー 川島アソシエイツ
理事長 堀崎 亘 氏 代表 川島 久男 氏

川島 MICE施設の整備と共にさまざまな大型MICEの誘致に成功している愛知・名古屋地域。2013(平成25)年にはグローバルMICE強化都市に選定され、2015(平成27)年には地域の連携を強化しMICE誘致拡大に取り組むことを目的とする「愛知・名古屋MICE推進協議会」を設立され、行政、経済団体、大学、観光関係・産業振興・業界団体、運輸事業者などの関係者が協働で活動を展開されています。今日は、「愛知・名古屋MICE推進協議会」の事務局として、当該エリアのMICE推進の牽引役を担う名古屋観光コンベンションビューローの堀崎理事長に、愛知・名古屋のMICE戦略についてお聞きします。

MICEがもたらす効果は、参加者による観光経済効果をはじめ主催者・出展者支出等による高い経済効果にとどまらず、産業や学術・研究の発展、地域ブランドやシビックプライドの向上等、いわゆるレガシー効果をもたらすことが世界で立証されています。

観光地としては必ずしも知名度が高いとは言えない愛知・名古屋ですが、日

本を代表する「ものづくり」地域として、自動車、工作機械、航空宇宙などの産業分野での強み、関連企業や研究機関が集積する強みを生かしたMICE誘致推進を戦略の中核に据えて成功している点は、依然として観光資源をMICE政策の中心とする多くの都市・地域の参考になるのではないのでしょうか。

ところで愛知・名古屋のMICE誘致の歴史は、1980年代後半の第1次コンベンションブームに始まると聞いています。そこでまずは、これまでの取り組みの歴史についてお聞きします。

堀崎 名古屋市は、1989(平成元)年に市制100周年を記念して、「ひと・夢・デザインー都市が奏でるシンフォニー」をテーマに「世界デザイン博覧会」を開催しました。これに合わせて建設された白鳥センチュリープラザは、博覧会の白鳥会場のテーマ館として利用された後、半年間の改修工事を行い、1990(平成2)年4月に名古屋国際会議場として開館しました。さらに1990(平成2)年に観光振興とコンベンション誘致を進める組織

として「名古屋観光コンベンションビューロー」(以下：ビューロー)を設立しました。

また「世界デザイン博覧会」の開催を契機に、名古屋市は世界に開かれたデザインに関する情報発信基地をめざすとともに、デザインを大切にす世界に誇り得るまちづくりを進め、平和を願う感性あふれるデザイン都市を創造することを宣言する「デザイン都市宣言」(1989(平成元)年)を行いました。これを受けビューローでは世界三大デザイン団体の国際会議「世界デザイン会議(ICSID)」(1989(平成元)年：参加者46カ国、3,765人)、「インテリアデザイン会議(IFDI)」(1995(平成7)年：参加者36カ国、1,351人)／国際インテリアデザインフェア：来場者8,600人)、「グラフィックデザイン会議(ICGRADA)」(2003(平成15)年：参加者49カ国、3,807人)／世界グラフィックデザインフェア：来場者120,463人)を15年の歳月をかけて誘致・開催しました。

JNTOの国際会議統計で名古屋市の国際会議の開催件数は、その当時は3位、

愛知・名古屋MICE推進協議会の 新たな取り組み

平成29年度の新しい取り組みとして東京都、(公財)東京観光財団と連携して、海外から招請したキーパーソンのファムトリップを実施し、インセンティブ旅行の誘致を図りました。米国、ドイツ、デンマークなど9名のキーパーソンの方々に犬山城、明治村、レゴランド、リニア・鉄道館等を視察していただくとともに、ホテルの方々との情報交換会を開催し、当地域の魅力をお伝えしました。ものづくりの国内有数の拠点である当地域の魅力や歴史を理解していただくため、レセプション会場では、からくり人形師「九代玉屋庄兵衛」氏によるからくり人形の実演を行い、大きな関心を持っていただきました。今後とも当地域の魅力が伝わるアトラクションやユニークメニューなどのプランを開発しながら、インセンティブ旅行の誘致を図っていきます。

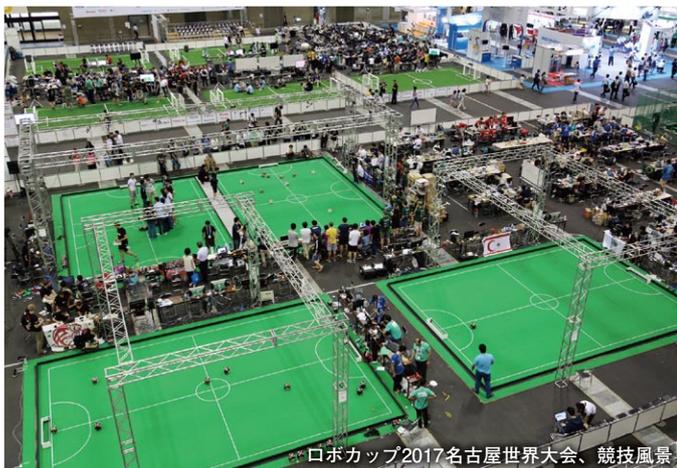


からくり人形実演

4位ぐらいの位置でしたが、現在は5位、6位と若干順位を下げており、競争の激化に加えリードタイムの長い国際会議誘致について、費用対効果の説明が難しく、社会の理解を得ることも容易でなかったのが原因であると考えています。

地元関係機関連携を促進する 愛知・名古屋MICE推進協議会

川島 国際会議の誘致競争が激化するなか、国は2012(平成24)年にMICE国



ロボカップ2017名古屋世界大会、競技風景

2020年「IJCAI(人工知能国際会議)」開催に向けて ～地域と連携した産業振興と気運づくり～

名古屋工業大学大学院 教授 伊藤 孝行氏

成長分野として注目を集める人工知能分野の研究者、技術者等が世界から一堂に会する「IJCAI2020(第29回人工知能国際会議)」について、(公財)名古屋観光コンベンションビューローの支援を得て、2016年7月に開催されたニューヨーク大会でプレゼンを行い、2020年名古屋開催誘致に成功しました。その結果を河村たかし名古屋市長に報告し、名古屋市の協力も約束していただきました。

2017年7月には人工知能を活用したロボットサッカー競技の世界大会「ロボカップ2017名古屋世界大会」が開催され、約13万人の来場者を得て、産業界のみならず広く市民の方々にもロボットや人工知能の関心が高まっています。ものづくりの世界的な集積地である当地域でも、従来型のものづくりの延長ではなくAIの技術革新の波に乗り大きな構造転換が求められています。このようななか、会議成功に向け名古屋市の産業振興部門と連携して、AI、ロボット等の産業振興に協力して盛り上げていく考えです。1月には、アートと人工知能をテーマにした文化庁メディア芸術祭愛知展に協力し、2020年のIJCAI2020(第29回人工知能国際会議)を紹介するシンポジウムを開催することで、人工知能を身近なものとして市民の関心を集めました。今後、2020年の国際会議開催までに、名古屋の魅力を堪能していただけるよう多様な企画の実現にも邁進していきたいと考えています。



市長への人工知能国際会議誘致成功の報告

際競争力強化委員会を設置し、MICE競争力強化へ向けた対策・取り組みの具体論について検討を行いました。この動きが、やがてグローバルMICE戦略都市の事業につながっていきました。

私もこの事業の中核である外国人コンサルタントによるマーケティング戦略強化プロジェクトのまとめ役として、2年間、外国人コンサルタントや優秀な日本人専門家と共に調査・報告・提言を行うなど、プロジェクト全体を管理してきました。この時期に愛知・名古屋のMICE戦略も転機を迎えたように思います。

堀崎 マーケティング戦略強化を進める中で、2015(平成27)年4月の「愛知・名古屋MICE推進協議会」の設立が契機になったと考えています。お話にあった観光庁のグローバルMICE戦略都市事業

において、愛知県と名古屋市も2013(平成25)年に「グローバルMICE強化都市」に選定され、以後2年間に亘って、コンサルティングを受けました。

そのなかでMICE誘致に向けての地元連携組織設立の機運が高まり設立されたのが、「愛知・名古屋MICE推進協議会」です。地元11団体のMICEステークホルダーが連携するこの協議会では、海外MICE商談会への出展・参加、東京におけるMICE説明会・懇談会の開催、国際会議のレセプション等へのアトラクション開催支援、MICEセミナーの開催など、新たな事業を積極的に行っています。

川島 グローバルMICE強化都市としての活動やステークホルダーとの連携により、地域におけるMICE誘致体制が確立されたと思います。一方、愛知・名古屋では、以前からものづくりの拠点としてのポジションを活かしたMICE誘致が進められてきたように思われます。この点については、いかがですか。



(公財)名古屋観光コンベンションビューロー
理事長 堀崎 巨氏

堀崎 1994年に、名古屋国際会議場の第2期整備の完成を記念して、当地域ならではの国際会議「世界都市産業会議」(参加者2,000人)を名古屋市経済局産業部とビューローで企画・実施しました。この地域の産業の繁栄が未来永劫ではないとの前提に立ち、20年先の新産業を探ることを目的とする国際会議で、この頃から名古屋市では産業振興部門と連携して国際会議を誘致する重要性を認識していました。2011年頃にドイツで始まったインダストリー4.0(第四次産業革命)に着目し、AI・ロボットの分野をターゲットにした国際会議の誘致を模索し、浮かんできたのがロボカップ世界大会です。2017(平成29)年7月、名古屋市国際展示場(ポートメッセなごや)と武田テバオーシャンアリーナで世界42ヶ国・地域から3,000人近くの競技者、約13万人の来場者を集めて開催された「ロボカップ2017世界大会」は、2014(平成26)年より誘致活動を行い、翌年7月シドニーとの誘致競争に打ち勝ち開催が決定しました。ロボカップは周知のとおりロボットサッカーワールドカップの略で、「2050年までに、人型ロボットでサッカーのワールドカップ・チャンピオンに勝つ」ことを目標とした、知能を持った自律移動ロボットによる国際的なサッカー競技大会です。サッカー以外に、レスキュー、アットホームなどの競技部門やジュニア大会があり、実は第1回ロボカップの開催地は名古屋でした。1997年に名古屋で開催された「第15回人工知能国際会議」の関連イベントとして始まったもので、以来、世界各地で毎年開催され、2017年、20年ぶりに名古屋での開催となったのです。

その経緯は、ビューロー職員がロボカップ日本委員会の事務局長を訪問した際、国際委員会の次期会長に日本人が就任予定であること、その任期が3年で最終年に世界大会を日本に誘致する計画があるとの情報を入手したことから始まりました。名古屋開催のための企画書を作成し、ステークホルダーを訪ね、協力をお願いしました。通常の学会等の誘致と異なり、行政、経済団体、業界などを束ねたローカルコミッティーを設立する必要がある、その調整に苦労したと担当者から聞いています。

主催者と連携して取り組む 市民参加プログラムの拡大

川島 大規模MICEであるロボカップの誘致を成功させたわけですが、その後もロボットとも深い関係にある人工知能会議などの関連分野で、MICEを戦略的に誘致することに成功していますが、どのような経緯でこうした誘致が実現したのですか？

堀崎 昨年7月に開催されたロボカップ世界大会は、アマゾン、ソニー、トヨタを始めとするAIやロボット関連の多くの先端企業の協賛を得ることができ、世界がAI、ロボット、IoT等に注目するタイミングで注目され、多くの新聞に掲載され、テレビ放映もされました。そもそもロボカップは1997年に名古屋で開催された「第15回人工知能国際会議」の関連イベントとして始まったので、ロボカップ関係者が人工知能学会のキーパーソンでもあったことから誘致活動が円滑に進み、2017年5月の人工知能学会全国大会、2020年の人工知能国際会議の誘致を実現しました。

川島 その後も、関連分野のMICEの誘致に弾みがかかっていますでしょうか。

堀崎 昨年度は、2020年に開催予定の「ワールド・ロボット・サミッ

ト」を愛知県が誘致しましたが、ビューローは名古屋市と共にロボカップ誘致のノウハウ等を活かして愛知県に協力しました。今年度は、人工知能関連で機械学習(マシーン・ラーニング)の国際会議である「アジア機械学習国際会議(ACML)」の誘致に成功しています。また、今年1月に開催された「文化庁メディア芸術祭愛知展」の一環として開催された「第29回人工知能国際会議開催記念フォーラム」についてもサポートするなど、市民の方々にも関心を持っていただけるような企画も進めています。今後も、主催者と連携し、市民の方々に参加できるプログラムの充実を図っていきたく考えています。

産業振興のために MICEを誘致する

川島 産業振興のためにMICEを誘致する戦略ですが、同時に愛知・名古屋地域の産業集積がMICEを誘引するという理想的な循環が生まれているわけですね。

堀崎 当地域は、先端産業の集積はもちろん、大学や研究機関も高度な研究を進めており、名古屋大学では6人のノーベル賞受賞者を輩出しています。先端研究は当地域の産業振興の基盤であり、国際会議に参加する研究者や地元企業との交流機会が増加すれば、新たなイノベーションを生む契機になります。愛知県の基幹産業である自動車産業をはじめとする製造業の加工技術や生産性向上を支えその発展に寄与するロボット技術は、医療・介護や生活支援など幅広い分野での活用への期待が高まっています。ロボット産業の将来市場規模や製造品出荷額等、事業所数及び



愛知県国際展示場

従業員数、いずれも全国1位の高いポテンシャルをベースに、愛知県ではロボット産業を自動車、航空宇宙に次ぐ、第3の柱として大きく育てていくことをめざし、2014(平成26)年に「あいちロボット産業クラスター推進協議会」を設立し、さまざまな活動を展開しています。

また我が国随一の航空宇宙産業の集積地として、その発展を支えてきた中部地域では、2011(平成23)年に愛知県・岐阜県が国際戦略総合特区「アジアNo.1航空宇宙産業クラスター形成特区」に指定され、そのエリアは2013(平成25)年には三重県まで、2014(平成26)年には長野県・静岡県へと拡大されました。現在、中部5県・345の企業や団体の参加により、フルセットのクラスター形成に向けて大きく前進し、アメリカのシアトル、フランスのトゥールーズと肩を並べる航空宇宙産業の世界三大拠点の形成をめざしています。

こうした取り組みの中、愛知県では2019年、中部国際空港島に国内初の国際空港直結の展示場「愛知県国際展示場」を誕生させます。6万㎡の展示面積を有し、2019・2020年の「技能五輪全国大会・全国アビリンピック」、先述の「ワールド・ロボット・サミット」もこの愛知県国際展示場で開催されます。

川島 愛知・名古屋地域は、産業だけでなく学術・研究分野においても層が厚く、2019年には、4年に一度開催される日本最大規模の学会である「第30回日本医学会総会」が、「医学と医療の深化と広がり～健康長寿社会の実現をめざして～」をテーマに当地で開催されるなど大きな可能性を感じます。

さて東京と名古屋を40分で結ぶリニア中央新幹線の建設について、2027年の開通をめざし建設が急ピッチで進ん

でいます。これが完成すれば1時間圏内に7,000万人の大交流圏が出現し、地域経済・産業・文化などが大きく変貌することが見込まれます。愛知・名古屋の今後のMICE誘致の進め方をどのようにお考えですか。

堀崎 MICEのEにあたる展示会、イベントについても、AI・ロボット関連の誘致を進めたいと思っています。現在、この分野では多くの集客が見込まれており、他都市との競争も激しくなっていますが、関連MICEの実績をベースに有利に進めたいと考えています。

MICEのIにあたるインセンティブ旅行については、産業の強みを活かした誘致を進め、大規模かつ経済波及効果の高いインセンティブ旅行の誘致を進める考えです。併せて、本年度創設したインセンティブ旅行を対象にした助成制度、展示会の助成制度の利用促進を積極的にアピールしてまいります。MICEのCにあたる国際会議の誘致においても、助成金の限度額を200万円から1,000万円に増額するなど助成制度の充実に努め、より大規模な国際会議の誘致を推進しています。

川島 最後になりますが、今後のMICE誘致はグローバルな競争、特にアジア地域内での競争がより激化します。このようななか、愛知・名古屋では、将来に向けてどのようにMICE振興を図るお考えですか。

堀崎 愛知・名古屋がこれまで取り組んできた産業振興と連携してMICEを誘致する「愛知・名古屋モデル」をさらに進めます。併せてMICE開催適地としての愛知・名古屋のプレゼンスを高め、国内有数のMICE都市をめざします。

MICE誘致についての競争が激化していますが、例えば、当地域では中部国際空港島に2019年9月1日オープン予定の6万㎡の展示面積を有する愛知県国際展示場の建設が急ピッチで進んでいるほか、名古屋市の金城ふ頭も国際展示場の第1展示館の移転拡張が計画されており、2022年秋のオープ



川島アソシエーツ
代表 川島 久男氏

ン時には、既設の展示場と合わせ展示面積計4万㎡の展示場にリニューアルされます。さらにホテルも建設ラッシュにあり、2020年までに約4,000室のキャパシティが増加します。その他、中部国際空港島内には、今年の夏にボーイング787初号機の展示を中心とした複合商業施設「フライト・オブ・ドリームズ」がオープンするほか、名古屋のシンボルの名古屋城においては復元中の本丸御殿が完成し、6月8日に全面公開となります。また本丸御殿の完成に先立ち、3月29日には、名古屋城の正門、東門それぞれの周辺に名古屋めし等を提供するレストラン等で構成される商業施設「金シャチ横丁」がオープンするなど新たな魅力が加わります。このようなハード面の充実と並行して、ソフト面でもMICEの誘致・開催支援策の充実を図るほか、ICCA(国際会議協会)のデータベースを分析してMICE誘致に活用できるプロフェッショナルな職員をいかに多く育成できるかが、今後の愛知・名古屋の発展の大きなポイントとなります。こうしたソフト面の拡充実現に向けても、さらに努力していきたいと考えております。

川島 産業振興と連携してMICE誘致を推進する取り組みは、シンガポールのようなMICE先進国の例はありますが、国内では愛知・名古屋地域がフロントランナーです。この取り組みを強力に推進するために、国内有数のMICE都市をめざしハードのみならず人材育成をはじめとしたソフト面の振興も同時に進めていくというお話でした。ぜひ、MICE主催者、参加者、出展者に選ばれる愛知・名古屋地域を実現いただきたいと思います。



名古屋市国際展示場 イメージ図